

試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

岡山医療専門職大学 一般選抜（1次）・特待生チャレンジ試験

国語

（
100
点
60
分
）

【注意事項】

- 1 この問題冊子は、27ページあります。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 2 解答は、別紙の解答用紙の解答欄に記入しなさい。
- 3 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 4 不正行為について
 - ① 不正行為に対しては厳正に対処します。
 - ② 不正行為に見えるような行為が見受けられた場合は、監督者が注意します。
 - ③ 不正行為を行った場合は、その時点で受験を取りやめさせ退室させます。

第1問 次の問い（A・B）に答えよ。

A 次の問い（問1～問3）の四字熟語の空欄に入る漢字をそれぞれ①～⑤のうちから一つ選べ。

問1 不眠 休

- ① 負
- ② 不
- ③ 府
- ④ 付
- ⑤ 布

問2 千 一遇

- ① 歳
- ② 際
- ③ 災
- ④ 載
- ⑤ 最

問3 五里 中

- ① 無
- ② 夢
- ③ 霧
- ④ 務
- ⑤ 武

B 次の問い（問1・問2）の言葉の意味として最も適切なものをそれぞれ①～⑤のうちから一つ選べ。

問1 他山の石とする

- ① 他人の優れた言動を、自分の手本にすること。
- ② 他人のつまらない言動でも、自分の反省の材料にすること。
- ③ 他人の成功を見て、自分も同じようになろうと決意すること。
- ④ 他人の失敗を、面白がって見物すること。
- ⑤ 自分には関係のない他人の問題とすること。

問2 木に縁りて魚を求む

- ① 手段が間違っているため、目的が達成できないこと。
- ② 不可能だと思われることでも、努力すれば叶うこと。
- ③ 専門外のことに出して、大失敗すること。
- ④ 自然の摂理に逆らわず、あるがままに生きること。
- ⑤ 調和や釣り合いがとれないことや、不自然で筋が通らない、条理の通らないこと。

第2問 次の文章は、二〇〇二年に刊行された科学論の一節である。これを読んで、後の問い(問1～問6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に **1** ～ **13** の番号を付してある。また、表記を一部改めている。

1 現代社会は科学技術に依存した社会である。近代科学の成立期とされる十六世紀、十七世紀においては、そもそも「科学」という名称で認知されるような知的活動は存在せず、伝統的な自然哲学の一環としての、一部の好事家による楽しみの側面が強かった。しかし、十九世紀になると、科学研究は「科学者」という職業的専門家によって各種高等教育機関で営まれる知識生産へと変容し始める。既存の知識の改訂と拡大のみを生業とする集団を社会に組み込むことになったのである。さらに二十世紀になり、国民国家の競争の時代になると、科学は技術的な威力と結びつくことによって、この競争の重要な戦力としての力を発揮し始める。二度にわたる世界大戦が科学―技術の社会における位置づけを決定的にしていたのである。

2 第二次世界大戦以後、科学技術という営みの存在は膨張を続ける。^(注1) プライスによれば、科学技術という営みは十七世紀以来、十五年で^(注2) **バイゾウ**するという速度で膨張してきており、二十世紀後半の科学技術の存在はGNPの二パーセント強の投資を要求するまでになっている。現代の科学技術は、かつてのような思弁的、宇宙論的伝統に基づく自然哲学的性格を失い、^A **先進国**の社会体制を維持する重要な装置となってきた。

3 十九世紀から二十世紀前半にかけては科学という営みの規模は小さく、にもかかわらず技術と結びつき始めた科学―技術は社会の諸問題を解決する能力を持っていた。「もつと科学を」というスローガンが説得力を持ち得た^(注3) 所以である。しかし二十世紀後半の科学―技術は両面価値的存在になり始める。現代の科学―技術では、自然の仕組みを解明し、宇宙を説明するという営みの比重が下がり、実験室の中に天然では生じない条件を作り出し、そのもとでさまざまな人工物を作り出すなど、自然に介入し、操作する能力の開発に重点が移動している。その結果、永らく人類を脅かし苦しめてきた病や災害といった自然の脅威を制御できるようになってきたが、同時に、科学―技術の作り出した人工物が人類にさまざまな災いをもたらし始めてもいるのである。科学―技術が恐るべき速度で生み出す新知識が、われわれの日々の生活に商品や製品として放出されてくる。いわゆる「環境ホルモン」^(注3) や地球環境問題、先端医療、情報技術などがその例である。^B こうして「もつと科学を」というスローガンの説得力は低下し始め、「科学が問題ではないか」という新たな意識が社会に生まれ始めているのである。

4 しかし、科学者は依然として「もつと科学を」という発想になじんでおり、このような「科学が問題ではないか」という問いかけを、科学に対する無知や誤解から生まれた情緒的反発とみなしがちである。ここからは、素人の一般市民への科学教育の充実や、科学啓蒙プログラム（けいもうプログラム）の展開という発想しか生まれないのである。

5 このような状況に一石を投じたのが科学社会学者の**コリンズとピンチ**の『ゴレム』である。（注4）ゴレムとはユダヤの神話に登場する怪物である。人間が水と土から創り出した怪物で、魔術的力を備え、日々その力を増加させつつ成長する。人間の命令に従い、人間の代わりに仕事をし、外敵から守ってくれる。しかしこの怪物は不器用で危険な存在でもあり、適切に制御しなければ主人を破壊する威力を持っている。コリンズとピンチは、現代では、科学が、全面的に善なる存在か全面的に悪なる存在かのどちらかのイメージに引き裂かれているという。そして、このような分裂したイメージを生んだ理由は、科学が実在と直結した無謬（むびゅう）の知識という神のイメージで捉えられてきており、科学が自らを実態以上に美化することによって過大な約束をし、それが必ずしも実現しないことが幻滅を生み出したからだという。つまり、全面的に善なる存在というイメージが科学者から振りまかれ、他方、**チェルノブイリ事故**や**狂牛病**（注5）に象徴されるような事件によって科学への幻滅が生じ、一転して全面的に悪なる存在というイメージに変わったというのである。

6 コリンズとピンチの処方箋は、科学者が振りまいた当初の「実在と直結した無謬の知識という神のイメージ」を科学の実態に即した「不確実で失敗しがちな向こう見ずでへまをする巨人のイメージ」、つまり、ゴレムのイメージに取りかえることを主張したのである。そして、科学史から七つの具体的な実験をめぐる論争を取り上げ、近年の科学社会学研究に基づくケーススタディーを提示し、科学上の論争の終結がおよそ科学哲学者が想定するような論理的、方法論的決着ではなく、さまざまな**YOU（イ）ン**が絡んで生じていることを明らかにしたのである。

7 彼らが扱ったケーススタディーの一例を挙げよう。一九六九年に**ウェーバー**が、十二年の歳月をかけて開発した実験装置を用いて、（注8）重力波の測定に成功したと発表した。これをきっかけに、追試をする研究者があらわれ、重力波の存在をめぐる論争となったのである。この論争において、実験はどのような役割を果たしていたかという点が興味深い。追試実験から、ウェーバーの結果を否定するようなデータを手に入れた科学者は、それを発表するかいなかという選択の際に、**ヤツカイ**な問題を抱え込むのである。否定的な結果を発表することは、ウェーバーの実験が誤りであり、このような大きな値の重力波は存在しないという主張をすることになる。しかし、実は批判者の追試実験の方に不備があり、本当はウェーバーの検出した重力波が存在するということが明らかになれば、この追試実験の結果によって

彼は自らの実験能力の低さを公表することになる。

8 学生実験の場合には、実験をする前におおよそどのような結果になるかがわかっており、それと食い違えば実験の失敗が**セン**（**三**）**コク**される。しかし現実の科学では必ずしもそうは進まない。重力波の場合、どのような結果になれば実験は成功といえるかがわからないのである。重力波が検出されれば、実験は成功なのか、それとも重力波が検出されなければ、実験は成功なのか。しかしまさに争点は、重力波が存在するかどうかであり、そのための実験なのである。何が実験の成功といえる結果なのかを、前もって知ることはできない。重力波が存在するかどうかを知るために、「優れた検出装置を作らなければならない。しかし、その装置を使って適切な結果を手に入れないければ、装置が優れたものであったかどうかはわからない。しかし、優れた装置がなければ、何が適切な結果かということはわからない……」。コリンズとピンチはこのような循環を「実験家の悪循環」と呼んでいる。

9 重力波の論争に関しては、このような悪循環が生じ、その存在を完全に否定する実験的研究は不可能であるにもかかわらず（存在、非存在の可能性がある）、結局、有力科学者の否定的発言をきっかけにして、科学者の意見が雪崩を打って否定論に傾き、それ以後、重力波の存在は明確に否定されたのであった。つまり、論理的には重力波の存在もしくは非存在を実験によって決着をつけられていなかったが、科学者共同体の判断は、非存在の方向で収束したということである。

10 コリンズとピンチは、このようなケーススタディーをもとに、「もつと科学を」路線を批判するのである。民主主義国家の一般市民は確かに、原子力発電所の建設をめぐる、あるいは遺伝子組み換え食品の是非についてなどさまざまな問題に対して意思表示をし、決定を下さねばならない。そしてそのためには、一般市民に科学に「ついての」知識ではなく、科学知識そのものを身につけさせるようにすべきだ、と主張される。しかしこのような論争を伴う問題の場合には、どちらの側にも科学者や技術者といった専門家がついているではないか。そしてこの種の論争が、専門家の間でさえ、ケーススタディーが明らかにしたように、よりよい実験やさらなる知識、理論の発展あるいはより明晰な思考などによつては必ずしも短期間に解決できないのであり、それを一般市民に期待するなどというのはばかげていると主張するのである。彼らはいふ。一般市民に科学をもつと伝えるべきであるという点では、異論はないが、伝えるべきことは、科学の内容ではなく、専門家と政治家やメディア、そしてわれわれとの関係についてなのだ、と。

11 科学を「実在と直結した無謬の知識という神のイメージ」から「ゴレムのイメージ」（Ⅱ「ほんとうの」姿でとらえなおそうという主張は、科学を一枚岩とみなす発想を掘り崩す効果をもっている。そもそも、高エネルギー物理学、ヒトゲノム計画、古生物学、工業化学

などといった一見して明らかに異なる領域をひとしなみに「科学」となぜ呼べるのであろうか、という問いかけをわれわれは真剣に考慮する時期にきている。

12 D にもかかわらず、この議論の仕方には問題がある。コリンズとピンチは、一般市民の科学観が「実在と直結した無謬の知識という神のイメージ」であり、それを「ゴレム」に取り替えよ、それが科学の「ほんとうの」姿であり、これを認識すれば、科学至上主義の裏返し of 反科学主義という病理はイ^イやされるという。しかし、「ゴレム」という科学イメージはなにも科学社会学者が初めて発見したものではない。歴史的にはポピュラーなイメージといってもよいであろう。メアリー・シェリーが『フランケンシュタインあるいは現代のプロメテウス』を出版したのは一八一八年のことなのである。その後も、ステイーブンソンの『ジキル博士とハイド氏』、H・G・ウェルズの『モロー博士の島』さらにはオルダス・ハクスリーの『すばらしき新世界』など、科学を怪物にたとえ、その暴走を危惧するような小説は多数書かれており、ある程度人口に膾炙^{かいしや}していたといえるからである。

13 結局のところ、コリンズとピンチは科学者の一枚岩という「神話」を掘り崩すのに成功はしたが、その作業のために、「一枚岩の」一般市民という描像を前提にしまっている。一般市民は一枚岩的に「科学は一枚岩」だと信じている、と彼らは認定しているのである。言いかえれば、科学者はもちろんのこと、一般市民も科学の「ほんとうの」姿を知らないという前提である。では誰が知っているのか。科学社会学者という答えにならざるを得ない。科学を正當に語る資格があるのは誰か、という問いに対して、コリンズとピンチは「科学社会学者である」と答える構造の議論をしまっているのである。

(小林傳司「科学コミュニケーション」による)

(注)

- 1 プライス——デレク・プライス(一九二二—一九八三)。物理学者・科学史家。
- 2 GNP——国民総生産(Gross National Product)。GNI(国民総所得 Gross National Income)に同じ。
- 3 環境ホルモン——環境中の化学物質で、生体内でホルモンのように作用して内分泌系をかく乱するとされるものの通称。その作用については未解明の部分が多い。
- 4 コリンズとピンチ——ハリー・コリンズ(一九四三—)とトレヴァー・ピンチ(一九五二—)のこと。『ゴレム』は、一九九三年に刊行された共著である。

- 5 チェルノブイリ——現在はチオルノービリが正式な表記として使用されている。
チェルノブイリ事故——一九八六年四月二十六日、旧ソ連にあったチェルノブイリ原子力発電所の四号炉で起きた溶解、爆発事故のこと。
- 6 狂牛病——BSE (Bovine Spongiform Encephalopathy ウシ海綿状脳症)。牛の病気。脳がスポンジ状になって起立不能に陥り、二週間から半年で死に至る。病原体に感染した家畜の肉や骨から製造された人工飼料(肉骨粉)によって発症・感染した可能性が指摘されている。一九八六年、イギリスで最初の感染牛が確認された。
- 7 ウェーバー——ジョセフ・ウェーバー(一九一九～二〇〇〇)。物理学者。
- 8 重力波——時空のゆがみが波となって光速で伝わる現象。一九一六年にアインシュタインがその存在を予言していた。
- 9 重力波の存在は明確に否定された——ウェーバーによる検出の事実は証明されなかったが、二〇一六年、アメリカの研究チームが直接検出に成功したと発表した。

問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア) バイゾウ

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| ① 細菌 <u>バイ</u> ヨウの実験 | ② 印刷 <u>バイ</u> タイ |
| ③ 裁判における <u>バイ</u> シン制 | ④ 事故の <u>バイ</u> シヨウ問題 |
| ⑤ 旧に <u>バイ</u> したご愛顧 | |

(イ) ヨウイン

- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| ① 観客をドウ <u>イン</u> する | ② ゴウ <u>イン</u> な勧誘に困惑する |
| ③ コン <u>イン</u> 関係を結ぶ | ④ インボウに巻き込まれる |
| ⑤ 不注意にキ <u>イン</u> した事故を防ぐ | |

(ウ) ヤツカイ

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| ① ごリヤ <u>ク</u> がある | ② ツウヤ <u>ク</u> の資格を取得する |
| ③ ヤ <u>ク</u> ドシを乗り切る | ④ ヤ <u>ツ</u> キになって反対する |
| ⑤ ヤ <u>ツ</u> コウがある野草を探す | |

(エ) センコク

- | | |
|-------------------------|-----------|
| ① 上級裁判所へのジョウ <u>コク</u> | ② コクメイな描写 |
| ③ コクビヤ <u>ク</u> のつけない議論 | ④ コクソウ地帯 |
| ⑤ 筆跡がコク <u>ジ</u> した署名 | |

(オ) イやされる

① 物資をクウコ|する

③ コ|エツの心地を味わう

⑤ キョウウコ|として着任する

② ヒコ|を頻用する

④ コ|チヤクを断ち切る

問2 傍線部A「先進国の社会体制を維持する重要な装置となってきた」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 現代の科学は、伝統的な自然哲学の一環としての知的な楽しみという性格を失い、先進国としての威信を保ち対外的に国力を顕示する手段となることで、国家の莫大^{げんたい}な経済的投資を要求する主要な分野へと変化しているということ。
- ② 現代の科学は、自然の仕組みを解明して宇宙を説明するという本来の目的から離れて、人々の暮らしを自然災害や疾病から守り、生活に必要な製品を生み出すことで、国家に奉仕し続ける任務を担うものへと変化しているということ。
- ③ 現代の科学は、「科学者」という職業的専門家による小規模な知識生産ではなく、為政者の厳重な管理下に置かれる国家的な事業へと拡大することで、先進国間の競争の時代を継続させる戦略の柱へと変化しているということ。
- ④ 現代の科学は、「もつと科学を」というスローガンが説得力を持っていた頃の地位を離れ、世界大戦の勝敗を決する戦力を生み出す技術となったことで、経済大国が国力を向上させるために重視する存在へと変化しているということ。
- ⑤ 現代の科学は、人間の知的活動という側面を薄れさせ、自然に介入しそれを操作する技術により実利的成果をもたらすことで、国家間の競争の中で先進国の体系的な仕組みを持続的に支える不可欠な要素へと変化しているということ。

問3

傍線部B「こうして『もっと科学を』というスローガンの説得力は低下し始め、『科学が問題ではないか』という新たな意識が社会に生まれ始めているのである。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 二十世紀前半までの科学は、自然の仕組みを知的に解明するとともに自然の脅威と向き合う手段を提供したが、現代における技術と結びついた科学は、自然に介入しそれを操作する能力の開発があまりにも急激で予測不可能となり、その前途に対する明白な警戒感が生じつつあるということ。
- ② 二十世紀前半までの科学は、自然哲学的な営みから発展して社会の諸問題を解決する能力を獲得したが、現代における技術と結びついた科学は、研究成果を新商品や新製品として社会へ一方的に放出する営利的な傾向が強まり、その傾向に対する顕著な失望感が示されつつあるということ。
- ③ 二十世紀前半までの科学は、日常の延長上で自然の仕組みを解明することによって社会における必要度を高めたが、現代における技術と結びついた科学は、実験室の中で天然では生じない条件の下に人工物を作り出すようになり、その方法に対する端的な違和感が高まりつつあるということ。
- ④ 二十世紀前半までの科学は、その理論を応用する技術と強く結びついて日常生活に役立つものを数多く作り出したが、現代における技術と結びついた科学は、その作り出した人工物が各種の予想外の災いをもたらすこともあり、その成果に対する全的な信頼感が揺らぎつつあるということ。
- ⑤ 二十世紀前半までの科学は、一般市民へ多くの実際的な成果を示すことによって次の段階へと貪欲に進展したが、現代における技術と結びついた科学は、その新知識が市民の日常的な生活感覚から次第に乖離^{かいり}するようになり、その現状に対する漠然とした不安感が広がりつつあるということ。

問4 傍線部C「ゴレムのイメージに取りかえることを主張したのである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 全面的に善なる存在という科学に対する認識を、超人的な力を増加させつつ成長するがやがて人間に従属させることが困難になる怪物ゴレムのイメージで捉えなおすことで、現実の科学は人間の能力の限界を超えて発展し続け将来は人類を窮地に陥れる脅威となり得る存在であると主張したということ。
- ② 全面的に善なる存在という科学に対する認識を、水と土から産み出された有益な人造物であるが不器用な面を持ちあわせている怪物ゴレムのイメージで捉えなおすことで、現実の科学は自然に介入し操作できる能力を獲得しながらもその成果を応用することが容易でない存在であると主張したということ。
- ③ 全面的に善なる存在という科学に対する認識を、魔術的力とともに日々成長して人間の役に立つが欠陥が多く危険な面も備える怪物ゴレムのイメージで捉えなおすことで、現実の科学は新知識の探求を通じて人類に寄与する一方で制御困難な問題も引き起こす存在であると主張したということ。
- ④ 全面的に善なる存在という科学に対する認識を、人間の手で創り出されて万能であるが時に人間に危害を加えて失望させる面を持つ怪物ゴレムのイメージで捉えなおすことで、現実の科学は神聖なものとして美化されるだけでなく時には幻滅の対象にもなり得る存在であると主張したということ。
- ⑤ 全面的に善なる存在という科学に対する認識を、主人である人間を守りもするがその人間を破壊する威力も持つ怪物ゴレムのイメージで捉えなおすことで、現実の科学は適切な制御なしにはチェルノブイリ事故や狂牛病に象徴される事件を招き人類に災いをもたらす存在であると主張したということ。

問5 傍線部D「にもかかわらず、この議論の仕方には問題がある。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①

⑤のうちから一つ選べ。

① コリンズとピンチは、「ゴレム」という科学イメージを利用することによって、初めて科学の「ほんとうの」姿を提示し科学至上主義も反科学主義も共に否定できたとするが、それ以前の多くの小説家も同様のイメージを描き出すことで、一枚の岩のように堅固な一般市民の科学観をたびたび問題にしてきたという事実を、彼らは見落としているから。

② コリンズとピンチは、さまざまな問題に対して一般市民自らが決定を下せるように、市民に科学をもっと伝えるべきだと主張してきたが、原子力発電所建設の是非など、実際の問題の多くは「科学者」という職業的専門家の間でも簡単に解決できないものであり、単に科学に関する知識を伝えるだけでは、市民が適切に決定を下すには十分でないから。

③ コリンズとピンチは、科学を裂け目のない一枚の岩のように堅固なものと見なしてきたそれまでの科学者を批判し、古生物学、工業化学などといった異なる領域を一括りに「科学」と呼ぶ態度を疑問視しているが、多くの市民の生活感覚からすれば科学はあくまでも科学であって、実際には専門家の示す科学的知見に疑問を差しさむ余地などないから。

④ コリンズとピンチは、歴史的にポピュラーな「ゴレム」という科学イメージを使って科学は無謬の知識だという発想を批判したが、科学者と政治家やメディア、そして一般市民との関係について人々に伝えるべきだという二人の主張も、一般市民は科学の「ほんとうの」姿を知らない存在だと決めつける点において、科学者と似た見方であるから。

⑤ コリンズとピンチは、これまでの科学者が振りまいた一枚の岩のように堅固な科学イメージを突き崩すのに成功したが、彼らのような科学社会学者は、科学に「ついての」知識の重要性を強調するばかりで、科学知識そのものを十分に身につけていないため、科学を正当に語る立場に基づいて一般市民を啓蒙していくことなどできないから。

問6 この文章の表現と構成・展開について、次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) この文章の第1～8段落の表現に関する説明として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。

① 第1段落の「『科学者』という職業的専門家」という表現は、「科学者」が二十世紀より前の時代では一般的な概念ではなかったということ、かぎ括弧をつけ、「という」を用いて言い換えることによって示している。

② 第5段落の「このような状況に一石を投じた」という表現は、コリンズとピンチの共著『ゴレム』の主張が当時の状況に問題を投げかけ、反響を呼んだものとして筆者が位置づけているということを、慣用句によって示している。

③ 第6段落の「コリンズとピンチの処方箋」という表現は、筆者が当時の状況を病理と捉えたうえで、二人の主張が極端な対症療法であると見なされていたということを、医療に関わる用語を用いたたとえによって示している。

④ 第8段落の「優れた検出装置を」。しかし～わからない。しかし～わからない……」という表現は、思考が循環してしまっているということ、逆接の言葉の繰り返しと末尾の記号によって示している。

(ii) この文章の構成・展開に関する説明として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。

① 第1～3段落では十六世紀から二十世紀にかけての科学に関する諸状況を時系列的に述べ、第4段落ではその諸状況が科学者の高慢な認識を招いたと結論づけてここまでを総括している。

② 第5～6段落ではコリンズとピンチの共著『ゴレム』の趣旨と主張をこの文章の論点として提示し、第7～9段落で彼らの取り上げたケーススタディーの一例を紹介している。

③ 第10段落ではコリンズとピンチの説明を追いながら彼らの主張を確認し、第11段落では現代の科学における多様な領域の存在を踏まえつつ、彼らの主張の意義を確認している。

④ 第12段落ではコリンズとピンチの議論の仕方に問題のあることを指摘した後、具体的な事例を述べ、第13段落ではコリンズとピンチの主張の实质を確認して、筆者の見解を述べている。

第3問 次の文章は、野上弥生子の小説「秋の一日」（一九一二年発表）の一節である。一昨年の秋、夫が旅行の土産にあげびの蔓で編んだ手提げ籠を買ってきた。直子は病床からそれを眺め、快復したらその中に好きな物を入れてピクニックに出掛けることを楽しみにしていた。本文はその続きの部分である。これを読んで、後の問い（問1～問6）に答えよ。なお、表記を一部改めている。

「此秋になつたら坊やも少しはいあんよとして行けるだろ、小さい靴を穿かして一緒に連れて行こう。」
とこんな事を楽しんだ。けれどもその秋も籠は一度も用いらる事なく戸棚に吊られてあつた。直子は秋になると屹度何かしら病氣をするのであつた。その癖一年のうちに秋は彼女の最も好きな季節で、その自然の風物は一枚の木の葉でも一粒の露でも、涙の出るような涼い感銘を催させる場合が多いけれども、彼女は大抵それを病床から眺めねばならぬのである。ところが今年の秋は如何したせいが大変健かで、虫歯一つ痛まらずびんびんして暮らした。直子は明け暮れ軽快な心持ちで、もう赤ん坊を脱して一ッぱしいたずら小僧の資格を備えて来た子供を相手に遊び暮らしながら、毎年よそこに見はずした秋の遊び場のそこ此処を思いやつたが、そうなると又特別に行き度いと思う処もなかつた。

その内文部省の絵の展覧会が始まって、世の中は一しきりその取沙汰で賑やかであつた。直子の家では主人が絵ずきなので早々見に行つて来て、気に入つた四五枚の絵の調子や構図の模様などをあらまし話してくれた。二三の知つた画家の出した絵の様子なども聞いた。直子は去年も一昨年も見なかつたので、今年は早く行つて見ようと思つた。けれども長い間の望みの如く、彼のあげび細工の籠に好きな食べものを入れてぶらぶら遊びながらと云う事を思いついたのは、其前日の全く偶然な出来心であつた。直子は夕方の明るく暮れ行く西の空に、明日の晴れやかな秋日和を想像して左様しようと思つた。

「それが可い。展覧会は込むだろうから朝早くに出掛けて、すんだら上野から何処か静かな田舎に行く事にしよう。」
とそう思うと、誠に物珍らしい楽しい事が急に湧いたような気がして、直子は遠足を待つ小学生のような心で明日を待った。

あけの日は何時もより早目に起きて、海苔を巻いたり焼き結飯を拵つたり女中を相手に忙しく立ち働いた。支度が出来ていよいよ籠に詰め終つた時には、直子はただ訳もなく嬉しく満足であつた。菓子も入れた。無くてはならぬものと思つた柿も、きざ柿の見事なのを四つ五つ入れた。提げて見ると随分重かつた。

「それをみんな食べて来る気かい。」

と云つて家の人々は笑つた。

上野の山は可なり久しぶりであつた。直子は新らしい帽子、新らしい前掛けに可愛らしく装われた子供の手を引いて、人気の^Ⅱ稀れな朝の公園の並木道を竹の台の方へ歩いて行つた。小路に這入ると落葉が多かつた。灰色、茶色、鈍びた朱色、種々な木の葉の稍焦げた芝の縁や古い木の根方などに乾びつつ集まっているのが、歩みの下にさくさくと鳴るのも秋の公園の路らしかつた。其処此処の立ち木も大抵葉少なな^Ⅲあらわな姿になつて、園内は遠くの向うまで明るく広々と見渡された。その葉のない淋しい木の枝に大きな鴉が来て、ぽつとりと黒く留まつてるのが、町中の屋根の端なぞにたまたま見るものなどよりもずっと大きく、ずっと黒く、異様な鳥のように直子の目に映つた。その鴉が枝からかアカアカと鳴いて立つと、子供も

「かアカアカ。」

と云つて口真似をした。女中もその度に子供と一緒にかアカアカと真似をした。両大師前の路を古びた寺の土塀に添うて左に廻ると、急に賑やかな楽器の音が聞えて並木一つ越した音楽堂の前に大勢の人だかりが見えた。何処か小学校の運動会と見えて赤い旗などをくも、手に引き廻した中に、沢山な子供の群れがいた。近づいて見ると本郷区何々と染めぬいた大きい赤旗が立つて、長方形に取り囲まれた見物人の人垣の中に今小さい一群れの子供が遊戯を始めているところであつた。赤旗の下にある一張りの白いテントの内からは、ピアノ音がはずみ立つて響いた。くたびれて女中に負さつた子供は、初めて見る此珍らしい踊りの群れを、呆つけに取られた顔をして熱心に眺めた。直子も何年ぶりかでこんな光景を見たので、子供に劣らぬもの珍らしい心を以て立ち留まつて眺めていたが、五分許りも見ている間に、ふと訳もない涙が上瞼の内から熱くにじみ出して来た。訳もない涙。直子はこの涙が久しく癖になつた。何に出る涙か知らぬ。何に感じたか、そのつく前に、ただ流れ出る涙であつた。なんでもない朝夕の立ち居の間にも不図この涙におそわれる事があつた。子供に乳房を与えながら、その清らかなまじめな瞳を見詰めている内に溢るる涙のとどめられなくなる時もあった。可愛いと云うのか、悲しいと云うのか、美しいからか、清らかな故にか、なんにも知らぬ。今日の前に踊る小さい子供の群れ、秋晴の空のま下に、^Ⅳ透明な黄色い光線の中をただ小鳥のように魚のように、手を動かしたり足をあげたりしている、ただその有様が胸に沁むのである。直子はその心持から女中の肩を乗り出して眺め入つて自分の子供を顧みると、我知らず微笑まれたが、^Ⅴこの微笑の底にはいつでも涙に変わる或物が沢山隠れているような気がした。

此涙の後に浮ぶ、いつもの甘い悲しみを引いた安らかな心は、落ち着いて絵を見て歩きくのに丁度適した心持ちであった。こう云うと一っぱし見る目のついた人のようだけれども、^v直子は本統は画の事などは何にも知らぬのである。ただ好きと云う事以外には、家で画の話を聞く機会が多いと云う事以外には、^{vi}画の具の名さえ委しくは知らぬ素人である。^(注4)陳列替えになった三越を見に行くのと余り大した違いのない見物人の一人である。家を出る時、子供連れで初めから一枚一枚丁寧に見て行つては大変だから、余り疲れぬ内に西洋画の方に行けと云いつかつていたから、直子は其言葉に従つて最初の日本画の右左に美しい彩色の中を通りぬけて奥の西洋画の室に急いで行こうとした。其間にも非常に画の好きな此二つの自分の子供が、朝夕家の人々から書いて貰う、鳩の画、犬の画、猫の画、汽車の画などの粗い鉛筆画に引き代えて、こうした赤や青や黄や紫やいろいろな画の具を塗った美しい大きな画を、どんな顔をして眺めるだろうか、と云う事に注目する事は怠らなかつた。子供は女中の背中からさもさも真面目な顔つきをして左右の絵の壁を眺め廻した。そしてたまたま自分の知った動物とか鳥とか花とかの形を見出した時には、非常に満足な笑ひ方をしたが、彫刻の並んだ明るい広い室に這入った時に、女の裸体像を見つけては、「おっぱい、おっぱい。」

とさも懐しそうに指しをするのには直子も女中も一緒に笑い出した。まだ朝なのでこうした戯れも誰の邪魔にもならぬ位い入場者のかげは乏しかったのである。どの室もひっそりとして寂しく、高い磨りガラスの天井、白い柱、棕櫚の樹の暗緑色の葉、こう云うものの間に漂う^{vii}真珠色の柔らかない燦したような光線の中に、絵画も彫刻も、^{ix}暫時うるさい「品定め」から免れた悦びを歌いながら、安らかに休息してるかのように見えた。「瓦焼き」の前に来た時、直子は此画に対して聞かされた、当て気のない清らかな感情の溢れている、円満な真率な矢張り作者の顔の窺いてる画、と云う様な批評の声を再び思い起して見た。而して彼の碧い海から、二つの瓦釜から、左側の草屋根から、其前に働く男から、路ばたの子供から、花畑の紅い花、白い花から、これらすべての上に漲る明るい暖かそうな日光から、その声を探つて見て決して失望はしなかつた。けれども三十分程前会場の前の小さい踊りの群れを見た時のような奇しい胸のせまりはなかつた。ただ安らかに気持ちよく見られた。そして不図先日仏蘭西から帰った画家が持つて来て主人の書斎の壁にピンで止めたシャヴァンヌの「芸術と自然の間」とか云う銅版画を思い出した。^(注5)「幸ある朝」の前に立った時には、直子はいろいろ取り集めたような動揺した感情の許にあつた。けれどもそれは其画とは全く関係のない事で、ただ其画家と其義妹にあたる直子の古い学校友達との間につながる無邪気な昔話であつた。其友達は淑子さんと云つて直子などよりも二級上にいた姉さん分であつたけれども、同じ道筋の通学生で、親しいお仲間であつた。数学の飛び抜けて旨い人だったので、直子などの二三人の出来ない連中は、少し面倒な宿題でも出ると、もう考えるより先に淑子さんに頼んで解いて貰つ

ては、それをめいめいのノートに写して行つた。少し頑固な点のある位⁽¹⁾生一本なので、時とすると衝突して喧嘩をした。そんな時にはむきになってまっ青な顔をして怒る人であつた。それでも正直な無邪気な方なので直ぐ仲直りは出来た。

^x話は或る暑中休暇の事であつた。そう云う風な三四人の友達によつて、午前丈^だけいろいろな学科の復習をしたり、編み物をしたり、又新しい書物を読んだりする小さい会のようなものを拵^つて、二週間許り有益な楽しい日を作り度いと云う相談が出来た。勿論^{もちろん}淑子さんも其お仲間の積り^{つも}でいると、

「私は駄目よ。」

と云う意外な申出^{もうし}出でに皆んな当てが外れた。

「淑子さんが這入^{はい}つて下さらなくちゃ何にも出来なくなるわ。避暑にでも入^いらっしゃるの。」
と聞くと、

「左様じゃないんですけども、この夏は午前だけは是非用事があるんですもの。」

と云つてどうしても聞き入れないので、

「初^{はな}ッからそんな方が出^でては屹度長続きはしないから、いっそ止めましょうよ。」

とおしまいにはこんな⁽²⁾あてつけがましいお転婆を云つて止めてしまった。その日一緒につれ立って帰る時、淑子さんは直子に向^{むか}つて、

「私全く困^こつたわ。みんな怒^こつたでしようねえ。でもこれからお休みになると毎日義兄^{あに}の家に通わなくちゃならない事があるんですもの。」

と云つた。義兄と云うのはこの画家の事であつた。直子は油画でも始めるのかともつて尋ねて見ると、

「まさか。」

とにやにやして、

「今に秋になれば分^{わか}る事。」

と謎のような言葉を残して別れた。暑中休暇がすんで秋になって、おいおい画の季節が来た時白馬会^(注9)が開^ひけた。直子の友達仲間は例になつて毎年淑子さんから貰^{もら}う招待券でみんなして行つて見ると驚いた。淑子さんが画になつていたのであつた。確か「造花」とか云う題であつたと思う。大きな模様の浴衣を着た淑子さんが椅子に腰かけて、何か桃色の花を拵^つてる処の画なのであつた。みんな会話の時などを思い

当^{あた}つた。そして出し抜かれたような、珍らしい賑やかな心持ちになつて淑子さんを探すと、今まで傍^{そば}にいた人が遠くの向うの室に逃げて此方^{こちら}を見てにこにこ笑つて立っていた。

直子は今「幸ある朝」の前に立つて丁度その頃の事がいろいろ思い出されたのであつた。淑子さんはそれから卒業すると間もなくお嫁に行つて、そして間もなく亡くなられた。今はもうこの世にない人である。彼^{あの}「造花」の画のカンヴァスから此^このカンヴァスの間にはかれこれ十年近くの長い日が挟まつているのだけれども、ちつともそんな気はしない。ほんの昨日の出来事で、今にもあの快活な紅い頬をしたお転婆な遊び友達の群れが、どやどやと此室に流れ込んで来そうな気がする。そして其中に交じる自分は、ひとり画の前に立つ此自分ではなくつて全く違つた別の人のような気がする。直子はその親しい影の他人を正面に見据えて見て、笑い度いような冷やかしたような且憫^{かつあわれ}み度いような気がした。而してふり返る度にうつる過去の姿の、如何^{いか}にも価なく見すばらしいのを悲しんだ。直子はこ^こうした雲のような追懷^{追懐}に封じられてる内に、突然けたたましい子供の泣き声が耳に入った。驚いて夢から覺めたように声の方に行くと向うの室の棕櫚^{棕櫚}の蔭^{かげ}に女中に抱かれて子供は大声をあげて泣いている。如何したのかと思つたら、

「あの虎が恐^{こわ}いってお泣きになりましたので。」

と女中は不折^{ふせつ}の大きな画を見ながら云つて、

「もう虎はおりません。あちらに逃げて仕舞いました。」

となだめすかした。直子は急に堪^{たま}らなく可笑^{おか}しくなつたが子供は矢張り、

「とや、とや。」

と云つて泣くので、

「じゃもう出ましよう。虎^う、^い、^うが居ちや大変だからね。」

と大急ぎで出口に廻つた。

(注)

- 1 文部省の絵の展覧会——一九〇七年に始まった文部省美術展覧会のこと。日本画・洋画・彫刻の三部構成で行われた。
- 2 女中——ここでは一般の家に雇われて家事手伝いなどをする女性。当時の呼び名。
- 3 きざ柿——木についたまま熟し、甘くなる柿。
- 4 陳列替えになった三越——百貨店の三越は、豪華な商品をショーケースに陳列し、定期的に展示品を替えていた。
- 5 瓦釜——瓦窯。瓦を焼くためのかまど。
- 6 シャヴァンヌ——ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ(一八二四～一八九八)。フランスの画家。
- 7 「幸ある朝」——絵の題名。藤島武二(一八六七～一九四三)に同名の作品がある。この後に出てくる「造花」も同じ。
- 8 もって——「思つて」に同じ。
- 9 白馬会が開らけた——白馬会は明治期の洋画の美術団体。その展覧会が始まったということ。
- 10 不折——中村不折(一八六六～一九四三)。日本の画家・書家。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア) 呆^あつけに取られた

- ① 驚いて目を奪われたような
- ② 意外さにとまどったような
- ③ 真剣に意識を集中させたような
- ④ 急に眠気を覚まされたような
- ⑤ 突然のことにうれしそうな

(イ) 生^き一本

- ① 短気
- ② 純粹
- ③ 勝手
- ④ 活発
- ⑤ 強情

(ウ) あてつけがましい

- ① いかにも皮肉を感じさせるような
- ② 遠回しに敵意をほのめかすような
- ③ 暗にふざけてからかうような
- ④ あたかも憎悪をにじませるような
- ⑤ かえって失礼で慎みがないような

問2

傍線部A「誠に物珍らしい楽しい事が急に湧いたような気がして」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① この秋はそれまでの数年間と違って体調がよく、籠を持ってどこかへ出掛けたいと考えていたところ、絵の鑑賞を夫から勧められてにわかに興味を覚え、子供と一緒に絵を見ることが待ち遠しくなったということ。
- ② 長い間患っていた病気が治り、子供も自分で歩けるほど成長しているので一緒に外出したいと思っていたところ、翌日は秋晴れのようだから、全快を実感できる絶好の日になるとふと思いついて、心が弾んだということ。
- ③ 珍しく秋に体調がよく、子供とどこかへ出掛けたいのに行き先がないと悩んでいたところ、夫の話から久しぶりに絵の展覧会に行こうとは思いつき、手頃な目的地が決まって楽しみになったということ。
- ④ 籠を持って子供と出掛けたいと思いながら、適当な行き先が思い当たらずにいたところ、翌日は秋晴れになりそうだから、展覧会の絵を見た後に郊外へ出掛ければいいとふいに気がついて、うれしくなったということ。
- ⑤ 展覧会の絵を早く見に行きたかったが、子供は退屈するのではないかとためらっていたところ、絵を見た後にどこか静かな田舎へ行けば子供も喜ぶだろうと突然気づいて、晴れやかな気持ちになったということ。

問3

傍線部B「この微笑の底にはいつでも涙に変わる或物^{あるもの}が沢山隠れているような気がした」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 思わずもらした微笑は、身を乗り出して運動会を見ている子供の様子に反応したもののだが、そこには病弱な自分がいつも心弱さから流す涙と表裏一体のものと感じたとしたこと。
- ② 思わずもらした微笑は、小学生たちの踊る姿に驚く子供の様子に反応したもののだが、そこには無邪気な子供の将来を思う不安から流す涙につながるものがあると感じたということ。
- ③ 思わずもらした微笑は、子供の振る舞いのかわいらしさに反応したもののだが、そこには純真さをいつまでも保ってほしいと願うあまりに流れる涙に結びつくものがあると感じたということ。
- ④ 思わずもらした微笑は、幸せそうな子供の様子に反応したもののだが、そこにはこれまで自分がさまざまな苦勞をして流した涙の記憶と切り離せないものがあると感じたということ。
- ⑤ 思わずもらした微笑は、子供が運動会を見つめる姿に反応したもののだが、そこには純粋なものに心を動かされてひとりであふれ出す涙に通じるものがあると感じたということ。

問4 傍線部C「こうした雲のような追懷に封じられてる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。

① 絵を見たことをきっかけに、淑子さんや友人たちと同じように無邪気で活発だった自分が、ささいなことにも心を動かされていたことを思い出した。それに引きかえ、長い間の病気が自分の快活な気質をくもらせてしまったことに気づき、沈んだ気持ちに陥っている。

② 絵を見たことをきっかけに、淑子さんをはじめ女学校時代の友人たちとの思い出が次から次へと湧き上がってきた。当時のことは鮮やかに思い出されるのに淑子さんはすでに亡く、自分自身も変化していることに気づかされて、もの思いから抜け出すことができずにいる。

③ 絵を見たことをきっかけに、親しい友人であった淑子さんと自分たちとの感情がすれ違ってしまった出来事を思い出した。淑子さんと二度と会うことができなくなった今となつては、慕わしさが次々と湧き起るとともに当時の未熟さが情けなく思われて、後悔の念に胸がふさがれている。

④ 絵を見たことをきっかけに、女学校の頃の出来事や友人たちの姿がとりとめもなく次々に浮かんできた。しかし、すでに十年近い時間が過ぎてしまい、もうこの世にいない淑子さんの姿がかすんでしまっていることに気づいて、懸命に思い出そうと努めている。

⑤ 絵を見たことをきっかけに、淑子さんが自分たちに仕掛けたかわいらしい謎によって引き起こされた、さまざまな感情がよみがえり、ふくれ上がってきた。それをたどり直すことで、ささやかな日常を楽しむことができた女学生の頃の感覚を懐かしみ、取り戻したいという思いにとらわれている。

問5 本文には、自分の子供の様子を見守る直子の心情が随所に描かれている。それぞれの場面の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 子供が歩き出すことを直子が想像したり、成長していたずらもするようになったことが示されたりする場面には、子供を見守り続ける直子の心情が描かれている。そこでは、念願だった秋のピクニックを計画する余裕もないほどに、子育てに熱中する直子の母としての自覚が印象づけられている。
- ② 「かアかアかア。」と鴉の口まねをするなど、目にしたものに子供が無邪気に反応する場面には、子供とは異なる思いでそれらを眺める直子の心の動きが描かれている。そこでは、長い間病床についていたために、ささいなことにも暗い影を見せしめる直子の不安な感情が暗示されている。
- ③ 運動会の小学生たちを子供が眺める場面には、その様子を注意深く見守ろうとする直子の心情が描かれている。そこでは、直子には見慣れたものである秋の風物が、子供の新鮮な心の動きによって目新しいものになっている様子が表されている。
- ④ 初めて接する美術品を子供が眺めている場面には、その反応を見守ろうとする直子の心情が描かれている。そこでは、美術品の中に自分の知っているものを見つけた子供が無邪気な反応を示す様子を、周囲への気兼ねなく楽しむ直子ののびやかな気分が表されている。
- ⑤ 「とや、とや。」と言って子供が急に泣き出した場面には、自分の思いよりも子供のことを優先する直子の心の動きが描かれている。そこでは、突然現実に戻された直子が、娘時代はもはや遠くなってしまったと嘆く様子が表されている。

問6

この文章の表現に関する説明として**適当でないもの**を、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

- ① 語句に付された傍点には、共通してその語を目立たせる働きがあるが、傍線部Ⅰ「あ、ん、よ」、傍線部Ⅲ「あら、わ」のように、その前後の連続するひらがな表記から、その語を識別しやすくする効果もある。
- ② 傍線部Ⅱ以降の落葉や傍線部Ⅶ以降の日本画の描写には、さまざまな色彩語が用いられている。前者については、さらに擬音語が加えられ、視覚・聴覚の両面から表現されている。
- ③ 傍線部Ⅳ「透明な黄色い光線」、傍線部Ⅷ「真珠色の柔らかない燐したような光線」のように、秋晴れの様子が室内外に差す光の色を通して表現されている。
- ④ 傍線部Ⅴ「直子は本統は画の事などは何にも知らぬのである」、傍線部Ⅵ「画の具の名さえ委しくは知らぬ素人である」は、直子の無知を指摘し、突き放そうとする表現である。
- ⑤ 傍線部Ⅸ「暫時うるさい『品定め』から免れた悦びを歌いながら、安らかに休息してるかのように見えた」は、絵画や彫刻にかたどられた人たちの、穏やかな中にも生き生きとした姿を表現したものである。
- ⑥ 直子が、亡くなった淑子のことを回想する傍線部Ⅹ以降の場面では、女学生時代の会話が再現されている。これによって、彼女とのやり取りが昨日のことのように思い出されたことが表現されている。